

(海外・国内) インターンシップ報告書

2016 年 2 月 15 日提出

氏名	武藤 芽未
所属	公衆衛生学教室
学年	DC2
活動先名	World Health Organization Vietnam country office, Vietnam
期間 ① (出発日―帰札日) ② (インターンシップ 実施開始日―終了日)	① 2015 年 12 月 6 日-2016 年 1 月 31 日 ② 2015 年 12 月 7 日-2016 年 1 月 29 日

帰国後 2 週間以内に提出してください (厳守) A4 用紙 4 枚以内

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

2014 年 11 月にベトナム WHO および北海道大学等の複数機関により共催された、ブタ連鎖球菌についての血清調査にオブザーバーとして同行する貴重な機会に恵まれ、その際にベトナム国内での感染症コントロールがどのように行われているのかをより身近に学びたいと感じた。ベトナムは発展途上国に分類されているが、近年の経済発展は目覚ましく、多くの外国企業が参入してきている。現在、このような発展を遂げる国がアジア域内には多く見られるが、保健行政については未着手な部分も多い。ベトナムはそれらの国の中でも経済発展が進んでいるが、保健行政についての意識がどの程度進んでいるのかは、日本国内にいては得られない情報も多い。その点について、保健行政のフォローアップをメインとする WHO ベトナムオフィスの活動をインターンシップを通して学びたいと考えた。

WHO でのインターンシップをリージョナルオフィスの WPRO ではなく、カンントリーオフィスに絞ったのも、国際的な感染症への対応ではなく、一国内での保健行政に WHO がどのように支援を行っているのかという点に着目したいと考えたためである。

・活動内容・成果 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

WHO ベトナムカンントリーオフィスでのインターンシップは 2015 年 12 月 7 日から 2016 年 1 月 29 日までの 8 週間実施され、配属先は Emerging disease Surveillance and Response team (ESR) であった。ESR は、人獣共通感染症を含めた感染症全般を取り扱う部門であり、感染症のアウトブレイクへの対応や感染症防止に向けたトレーニングプログラムなどの遂行に関わっている他、ベトナム政府の研究機関、医療機関など感染症に関するリスク評価を行う機関への技術的な助言を行っている。そのほかにも保健省における政策やガイドラインの制定などへのサポートも重要な仕事のひとつとなっている。

インターン中の主なテーマとして、「医療機関における薬剤耐性菌サーベイランスシステム」

について、アメリカや日本をはじめとした先進国からタイやフィリピンなどの中進国でのサーベイランスシステムを比較した。一口に薬剤耐性菌のサーベイランスシステムといっても、家畜に含まれるものや、医療機関で検出されるもの、また農業や環境中に含まれるものといったように目的に合わせて多種多様なサーベイランスシステムが存在する。今回はその中でも医療機関における薬剤耐性菌の検出システムという点に焦点を絞り、情報を収集した。ベトナムはアジアの国々の中でも、市民の耐性菌保有率が著しく高く、その要因として医療や畜産における抗菌薬の濫用が挙げられている。また、昨年には新生児集中治療室におけるカルバペネム耐性菌の院内感染が起こり、複数の新生児が亡くなるという事案も発生している。こういった状況の中で、ベトナム保健省は新しい感染症法の制定に向けて動き出している。その一環として院内感染の防止や抗生物質の適正な処方を行うために、医療機関における薬剤耐性菌のモニタリングシステムの早急な構築が望まれている。そのため各国の薬剤耐性菌サーベイランスシステムの状況をまとめ、ベトナムでのサーベイランスシステムの構築において重要な点についてまとめた。各国の情報は主にインターネットを介して収集し、情報が不明瞭な部分については WHO 内のネットワークを用いて e-mail での質問を行うことにより収集した。特に、対象となる微生物や検体となるサンプルの種類、またデータの取り扱い方法など複数の項目について比較を行った。他国との比較から感じた印象として、ベトナムでは検査データへの信頼性や耐性菌検査の受け入れ許容量が不安定な部分も多く、実験室における検査能力の底上げが最優先課題のように感じた。また同時に、医療従事者への薬剤耐性菌への啓蒙や衛生概念についての再教育といった点も大きな課題である。

インターンシップ期間中には、その他にも ESR チームとして遂行している、狂犬病、デング熱、インフルエンザ、食品安全など多種のプロジェクトのデータの統計学的な解析やワークショップなどに参加した。また、期間中に食品安全に関わるプロジェクトの一環でホーチミン市への出張に同行した。インターンシップ期間の最終日には、ベトナムオフィスのスタッフの前で 2 か月間の成果を発表した。その場で、ベトナムの医療機関での薬剤耐性菌に関する現状について多くの意見を交換することができ、有意義なディスカッションとなった。

本インターンシップでは、感染症のコントロールを普段の研究とは違った側面から見ることができ、感染症対策における保健行政の重要性を改めて実感することが出来た。実際の仕事内容としても、仕事を進める上で大事にすべき点や論理的な思考法といった点が、研究から見る感染症コントロールという問題とは異なる部分も多く、今後感染症コントロールについて考える上で視野を広げられたと考えている。また、自分がどのように WHO のような国際機関に貢献できるのかというイメージを、以前よりはしっかりしたものとして捉えられるようになり、今後のキャリアパスにおいて現在の自分に不足している部分、また必要となる部分を考える良い機会となった。例えばスペシャリストとジェネラリストにおける役割の違い、そして相互の協力の重要性を体感することができ、今後自分がどちらの立場で社会に貢献していくべきかという点を明確にしてい

きたいと考えている。

このインターンシップを行うにあたり、多大なるご尽力を頂きました教職員の皆様方にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



写真 1. 宿泊先前の大渋滞の様子



写真 2. UN オフィスの前で記念写真



写真 3. オフィス内の様子



写真 4. 送別会の様子

・今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

インターンとしての経験は、WHO での仕事を体験できたこと以上に、そこで働く人々と出会えたことが大きな財産となった。彼等がどのようなバックグラウンドを持ち、WHO で働くことを選んだのか、自分の強みをどのように活かしているのかを知ることが出来た。実際に自分のキャリアパスを考える上で大きな変化となったのは、“WHO で働くためにはこうでなくてはならない”という条件はないということに気付いた点である。自分の特性というものを理解し、その上で自分の強みをどのように形成していくか、どのように社会に貢献していくかは多様な選択肢があり、この選択の上に WHO という機関で働く機会があるのだと感じた。また今後、博士号を取得することによって選択肢を広げられるようなキャリアパスを形成していきたいと考えている。

・後輩へのアドバイス

WPRO とは異なるインターンシップの応募方法だったので、かなり早い段階から準備を行って

いても、インターンシップの日程が確定したのは出発の一か月前でした。したがって、インターンシップに行くことを決めた段階で自分の実験計画を見直し、実験を中断する事による研究への影響を最小限に出来るように心掛けたほうが良いと思います。また、インターンシップ中は出来れば研修先での仕事に集中した方がよいと思います。インターンとして任される仕事は少ないですが、基本的に分からない事ばかりだと思うので、その点の学習に時間を割いて、ミーティングなどでもディスカッションに積極的に参加するのはもちろん、少なくともミーティングの内容を理解できる程度の知識を備えたほうが良いと思います。インターンシップ期間中は、自分のやってきたこと（多くの学生がそうだと思いますが、実験手技や研究対象についての知識）が、全く役に立たないかのように思い込みがちです。しかし、ESR チームに限って言えば、病原体に対する知識やそのコントロールについての実験者側の意見は非常に重要であり、インターンとして貢献できる場面は多くあると感じました。そのためにも、日頃から専門性を高めておく必要性はあると思います。

また多くの場面で問われたのは、自分のバックグラウンドは何か、そして将来何をしたいと思っているかという点でした。この2点についてはしっかり考える良い機会となると思うので、渡航前に一度自分なりに考えて、英語で表現を出来るようにしておく自信をもって答えることが出来ると思います。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 獣医学研究科 公衆衛生学教室 教授 苅和 宏明 印
---------	--

- ※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。
- ※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
- ※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp